

沖縄本島の観光地調査

短期大学部地域総合科学科

講師 池口 功晃

① はじめに

昨年12月末、3泊4日の日程で、私は沖縄本島へ渡った。3年程前に竹富島の観光地調査をするため、石垣島に渡ったことはあるが、沖縄本島へ渡るのは今回が初めてである。沖縄本島については、複数の知人から「市街地はビルが多くて、本土と景色が変わらない。」「本島より他の離島の方が海がきれい。」など、あまり評判のよろしくない話を聞いてはいたが、個人的には今回の訪問を非常に楽しみにしていた。

その理由は多々あるが、やはり、美しい自然のイメージが私をそうさせるように思える。珊瑚礁がつくるエメラルド色の海、白い砂浜…こうした自然の風物は国内においては沖縄ならではのものだろう。また、歴史的な側面においても沖縄には訪れるべきところが多い。沖縄は、その昔、琉球王国であったことは広く知られているが、これが約450年も続いた王国であったことは意外に知られていないのではないだろうか。太平の世と称された江戸時代でさえ約260年しか続かなかったことを考えると、琉球王国がいかに長く繁栄したかわかる。また、太平洋戦争では日本で唯一地上戦となり、多くの犠牲をともなっているが、今なお日本国内の米軍専用施設の約7割が沖縄に集中しているという。「基地の島」である所以である。このように沖縄は自然、文化、歴史において訪れるべき場所が多い。そこで今回は沖縄本島の主要な観光地を調査し、その魅力について独自の視点で考察することにした。

② ひめゆり平和祈念資料館

那覇空港を降りたばかりの私がまず驚いたのは気温である。記憶が定かではないが20℃近くはあったように思える。つい2時間前までダウンジャケットを着ていた私にとって、この感覚は衝撃的だった。ここは本当に日本なのかと疑いたくなるくらい暖かいのである。私は空港内で、身に着けていたダウンジャケットをスーツケースにしまい、薄手のシャツで行動することにした。

私がまず向かったのはレンタカー会社である。聞くところによると沖縄本島はレンタカーが多いとのこと。確かに、那覇市中心部ではモノレールが走っているものの、鉄道はなく、主要な公共交通機関はバスかタクシーしかない。したがって観光客が行動する場合は大抵の場合、レンタカーになるのだという。

レンタカーを借りる手続きの最中、私は係員に対して最寄りのセブンイレブンの場所を尋ねた。コンビニのATMを利用するためである。ここで私は再び驚いた。係員の説明ではセブンイレブンは沖縄にはほとんど出店していないとのこと。事実、4日間にわたり沖縄本島を周回したが、ついに一店舗もセブンイレブンをみつけることができなかった。私は他のコンビニのATMを利用することにしたが、なぜセブンイレブンが沖縄本島へ出店していないのかについてとても気になった。気になったというより商業学的な興味を湧かしたと言ったほうが正確かもしれない。

レンタカーを借りて、まず向かったのはひめゆり平和祈念資料館である。ひめゆりの塔及びひめゆり平和祈念資料館は那覇市南方の糸満市にあ

る。那覇市からは車に乗って1時間足らずで到着した。ひめゆりの塔についてはテレビ等を通じてその存在を知ってはいたが、具体的なことは恥ずかしながらほとんど知らなかった。

館内には全部で6つの展示室があり、太平洋戦争中、沖縄で実際に起きたことについて、映像やパネルを使って分かりやすく、かつ詳しく説明されていた。ひめゆりの塔の「ひめゆり」とは植物の花のひめゆりとは関係はなく、沖縄師範学校女子部及び沖縄県立第一高等女学校のそれぞれの校友会誌「白百合」と「おとひめ」から、それぞれ文字を抜きとり組合わせたのが「ひめゆり」の由来であると資料館のパンフレットに記されていた。

太平洋戦争末期の1945年3月23日、米軍による沖縄上陸作戦が開始された。既述した両校の女生徒200名余りと教師18名は那覇市南部の沖縄陸軍病院に配属され、負傷した日本兵の看護などに追われるが、米軍が迫りくる中、突然の「解散命令」が出されたことで、各々が戦場を逃げ惑う結果となったのである。米軍による砲弾やガス弾で死に至る者もいれば、手榴弾で自ら命を絶った者もいたという。生き残った学徒はほんの僅かであったらしい。

館内では、今ではご高齢となられた元ひめゆり学徒の方が証言員として多くの来館者に当時の詳しい説明をされていた。また、展示パネルから現在の嘉手納基地は米軍の沖縄上陸が行われたまさにその場所にあることも知ることができた。米軍は、現在の嘉手納基地付近の西方の海岸から侵攻し、上陸後、北部及び南部の二方向に進軍することで沖縄本島の日本軍部隊を分断させ壊滅する作戦を進めたのである。

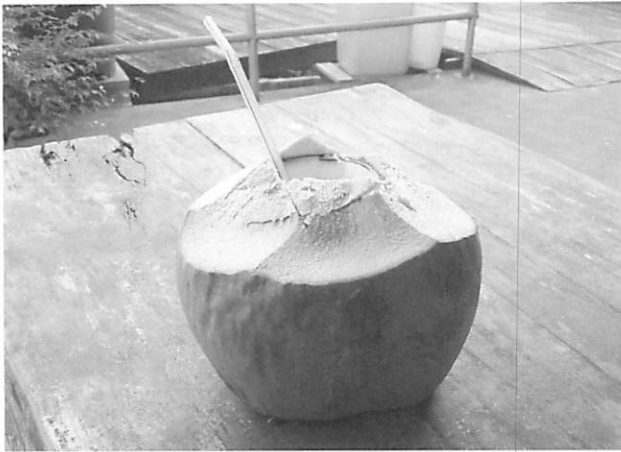
③ 玉泉洞とおきなわワールド

次に向かったのは「おきなわワールド」である。「おきなわワールド」は南城市にある国・登録有形文化財である。沖縄の自然、文化、歴史を体験できる観光施設で、地下には玉泉洞と名の付く鍾乳洞がある。後から述べるが、この観光施設は経営上、かなり戦略的に作られていると率直に感じ

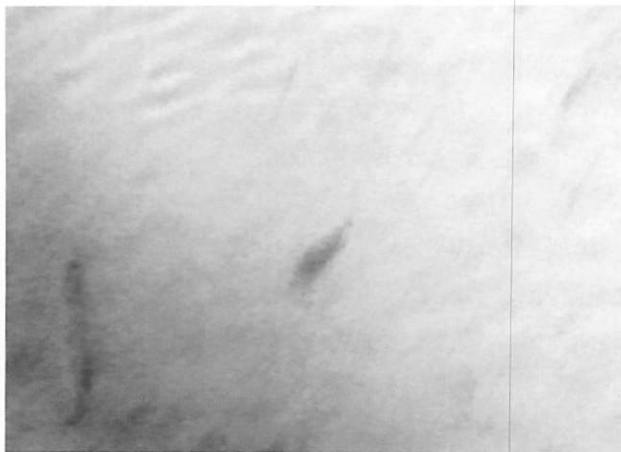
た。まず、入場口から地下に降りて行き玉泉洞を歩いて進むことになる。歩き始めのころは、さほど距離はないだろうとたかをくくっていたが、これが結構長い。後で気づいたのだがパンフレットには約30分と記されていた。玉泉洞の中は地下であるため湿気が多く、所々に勾配があり、意外にも体力を消耗することとなった。

鍾乳洞というものは個人的にはあまり好きではない。内部が暗いためか、美しいとは思えないからである。ただ、玉泉洞は観光地としてとても有名なので一度は行っておかねば話にならない、との思いから、ひたすら洞内を歩き続けた。出口が近づいてきたとき、少しばかりの発見があった。洞内は川のように水が流れているのだが、なんと水中に小魚が泳いでいたのである。水中に魚がいるのはある意味で当たり前であるが、ここは地下で、しかも暗闇である。ほとんど光が入って来ない場所に、どうして魚が生息できるのか不思議に思った。まさか深海魚の一種かとも思ったが、体のつくりからそうでもない様子である。プランクトンなどが豊富に含まれているのだろうか、しかし光がないはずだ、などとしばらく魚を観察していたが、後ろから他の観光客が迫ってきていたので、足早にその場を離れ地上の出口へと向かった。

地上へ出ると、今度は今進んできた方向へ戻ることになる。つまり、行きは地下の玉泉洞、帰りは沖縄の土産店や体験施設が並ぶ小道を通りながら戻る仕掛けになっている。私は旅行の際、ショッピングはしない方であるが、この時ばかりは見事にお金を使うはめとなってしまった。なぜなら、一つ一つの店に独自性があるから楽しいからである。椰子をその場でくり抜いた椰子ジュース、サトウキビをその場で砕いてつくるサトウキビジュースなど、本土ではなかなか味わうことのできない飲み物を楽しむことができた。また、沖縄伝統の紅型の作成体験ができる店があったり、「Dr. フィッシュ」というお店では小魚が沢山いる水槽に素足を突っ込むと、彼らが集まってきて足の角質を食べてくれた。テレビで見たことはあったが、実際に体験してみると結構くすぐったかった。



椰子の実ジュース



玉泉洞の小魚（中央）

4 嘉手納基地と与勝半島周辺の島々

沖縄は「基地の島」と言われる。二日目の朝は那覇市から北部へ車を走らせることにした。車で国道を走っていると次第に街中の看板に変化が現れる。英語表記が多くなるのである。これは、初日に訪れた南部ではあまり目にしなかった光景である。看板だけではない。前を走っている車のナンバープレートに目を向けるとYの文字が見える。普通は、「あ」とか「い」とかひらがなが使われている部分がYなのである。信号で止まった時に横に並んでみたのだが、運転しているのは明らかに外国人であった。おそらく米軍関係者だろう。結局、沖縄滞在中、Yのナンバープレートは、そのほとんどの場合、運転しているのは外国人だった。

嘉手納基地が近付くにつれ、上空で米軍とおぼ

しき輸送機が旋回しているのが見えた。同じ空域を何度も旋回しているの、どうやら訓練のようである。エンジンから出される真っ黒な煙と轟音が印象的だった。ここが基地の島であることを改めて思い知らされた。このような光景は本土ではなかなか見る機会はない。

ところで、沖縄本島には至る所で「キャンプ〇〇」という米軍の基地や施設があるが、この〇〇には太平洋戦争で戦績を残した軍人の名前がつけられているらしい。戦績とは見方を変えると、より多くの人間を殺した功績とも言えよう。このような基地名や施設名に対して、肉親や知人を戦争で亡くした沖縄の人々の感情はどのようなものか想像に難くない。

カーナビを予め嘉手納基地周辺に設定していたため、比較的楽に目的地にたどり着くはずであったが、目的地周辺に到着しても緑が多くてなかなか基地と認識できなかった。一体、どこに基地があるんだ、と半ばイライラしながら周囲を走っていると、ある場所で突然、滑走路を含む基地全体を見ることができた。正直に言って、想像をはるかに超えた巨大な基地だった。基地というより、その大きさは一つの街だった。おそらく、自衛隊の基地でさえも、あれほど大きな基地はないだろう。後ほど地図で確認したが、嘉手納基地の大きさは那覇市全体がそのまま収まってしまう位の大きさであった。これには本当に驚かされた。しかも軍用車両の数の多さは想像の域を超え、改めて「軍事力」の凄さを感じさせられた。

午後は、南東部の与勝半島へ向かった。この半島から伊計島まで橋が島伝いに架かっている。観



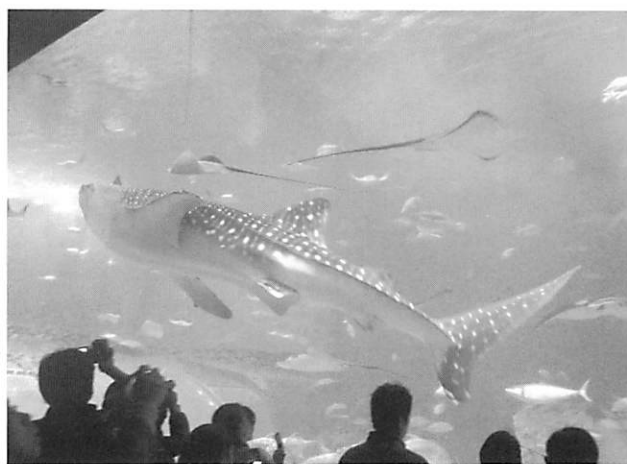
石油備蓄基地

光ガイドブックには「ドライブに最適」などと記されていたため、少しばかり寄ってみることにした。途中、周囲が柵で覆われている巨大な石油備蓄基地があった。当初は米軍に供給する燃料を保管しているのかと想像していたが、後でいろいろと調べてみると、どうやら地域振興が主たる目的であることがわかった。



伊計島へ向かう途中のさとうきび畑

部半島の北部に位置し、三山時代に北山王の居城として栄えた地である。三山時代とは西暦1320年頃から尚巴志が沖縄本島を統一するまでの約100年間をいう。今帰仁城跡は起伏に富んだ地形に沿って城壁が美しい曲線を描いているが、そのほとんどが石を野面（のづら）積（つ）みと呼ばれる自然のままに積み上げたものである。



美ら海水族館

5 海洋博公園と今帰仁城跡

三日目の朝は沖縄自動車道を利用して、本島北部へ向かった。沖縄自動車道は時速が80キロに規制されている。多少の勾配があり、道路も本土の高速道路と比べてやや狭く感じられた。また、サービスエリアも、記憶が正しければ1つか2つしかない。ただ、比較的高い所に建設されているため、所々で市街地や海を遠くに見渡すことができた。

許田インターチェンジを降りると名護湾を取り囲む県道58号を北上した。光の加減からか名護湾の海の色は本島南部の海の色に比べて美しく感じられた。海洋博公園に到着後、美ら海水族館へ向かった。美ら海水族館は、4階建構造となっているが、国内にある他の大型の水族館と比べて特別印象に残るものはなかった。この水族館では、ジンベイザメを大型の水槽で飼育しているが、これが一つの売りとなっているようだ。その様子を縦10m、横15mほどの大型のガラス越しに見物することができる。多くの家族連れで賑わっていた。

午後は今帰仁城跡へ向かった。今帰仁城跡は本

6 おわりに

以上、沖縄本島の主要な観光地を駆け足で巡ってきた。調査の課程で、3泊4日という時間は長くも短くも感じられたが、本島のおよそ主要な観光地を訪れることができたと考えている。この他にも、近年、修復が進む首里城及び首里城公園や、観光客で溢れかえる国際通りを訪れたりもした。しかし、紙面の都合上、これらは稿を改めたいと考えている。

冒頭も述べたが、私にとって沖縄本島への訪問は今回が初めてであった。したがって、多くの観光ガイドブックに載っているような主要な観光地を訪れることになったが、それでも沖縄本島は自然、文化、歴史で魅力溢れる島であることが十分に理解できた。本土から多くの人々が、沖縄を訪れる理由がよくわかる。しかし、より深く観光地を楽しむためには2、3度訪れてみないと分からないだろう。これは沖縄本島に限ったことではなく、どんな観光地にもいえることである。次回はあまり知られていない観光地も訪問したいと考えている。